

いきいき山梨ねんりんピック2023

山梨県シルバー俳句大会 入選作品集



◆展示期間 令和5年6月16日（金）～6月18日（日）
◆会 場 山梨県立図書館1階「イベントスペース」

主 催 いきいき山梨ねんりんピック実行委員会
主 管 社会福祉法人 山梨県社会福祉協議会

井 上 康 明 選

■特選■

冬ぬくし回向柱に幼の手

北杜市 小泉優子 七二歳

もう夫の行かれぬ山も眠りたり

西桂町 永田梅子 七九歳

屋号にて呼び合ふ村や野梅咲く

大月市 小林勝子 七九歳

残雪を消し行く雨の音なりし

富士吉田市 田辺和代 八一歳

菜の花や蛇笏の山河明るうす

市川三郷町 河西五十鈴 八五歳

■秀作■

再会を約したかの日秋の雲

身延町 片田駿三 七七歳

遠つ峰の影を踏みつつ麦を踏む

甲斐市 高橋正 八七歳

満水の青田を月と散歩する

市川三郷町 笠井文次 七三歳

単線の列車映して冬の海

甲府市 藤巻嘉秀 七一歳

稻の穂の垂れて風ある駒ヶ岳
南アルプス市 小松重和 八五歳
たんぽぽの首飾りして石仏

韮崎市 小林久子 九一歳

枯木山松一本の勢ひ立つ

北杜市 金子至 七九歳

赤松の亀甲深き冬に入る

甲府市 小林さち枝 八四歳

ばら銭を投げて春呼ぶ二月堂

北杜市 小山崇 七九歳

英单語ひとつ覚えて新茶かな

大月市 天野衣利子 六一歳

【評】

(特選句)
○一句目 寺院の記念すべき祭礼の為、御本尊とつながった回向柱が本堂の前にあります。冬から春への季節をこまやかに描いていました。富士山、八ヶ岳、駒ヶ岳など目の前に聳える山を対象に季節を大きく捉える作、又、暮らしの中の人と人とのぬくもりを語る作など内容は多岐に渡っています。コロナ禍が過ぎ俳句と向き合った成果だと思います。

(特選句)
○二句目 のでしょ。日差しの降り注ぐ冬日和の日、回向柱に触れた幼な子の手に尊い生命。
○二句目 御主人を亡くした女性の夫を追悼する内容の作品です。山が好きだった夫の、もう行くこと出来ない山が冬を迎えて静かに眠っています。一周忌ではないかと思いました。山が冬を迎えて静かに眠っています。春を待つ心とともにその雨の音を作者はじっと耳を傾けて聴いています。音に焦点を絞つて春を待つ心情を描きます。
○四句目 黄色い菜の花が甲斐の国があちらこちらに咲いているのでしょうか。飯田蛇笏が生涯をかけ詠んだ甲斐の国が菜の花によって明るくなつたと、春だけなわの風景を称えています。

保坂敏子選

■特選■

作務衣着て梅のぐあいを見に行こう

甲州市 日原満理子 七二歳

小春日や少女のやうな土偶の目

南アルプス市 小松和美 八四歳

春暁や一炊の夢醒めやらず

甲府市 渡辺 優 八六歳

言葉もう届かねば振る夏帽子

富士吉田市 渡辺武人 七九歳

山鳩が鳴いて始まる植木市

山梨市 丸山敏章 七一歳

■秀作■

棚田みな富士と向き合う鍬始

北杜市 松林新一 九二歳

カシニヨールのやうに目深に夏帽子

北杜市 萩澤芳子 八二歳

着るでなき母の形見の襦袍干す

富士吉田市 渡辺喜作 八二歳

土塊のほぐれて春の息づかひ

甲府市 渡辺 優 八六歳

雪の夜の無人駅舎の柱の灯

南アルプス市 西川由紀恵 七六歳

観梅や昼餉はジャズをききながら

韮崎市 樋口 芙美子 七八歳

富士立春雲のたてがみなびかせて

西桂町 梶原とき子 八二歳

秋の夜や紅茶をくぐる銀の匙

富士吉田市 宮下清江 八九歳

懇ろに屠蘇を祝ひて一人かな

富士吉田市 榎本慶子 八四歳

さがし物ふたつ見つかる日永かな

甲斐市 松田由紀子 七七歳

【評】

(特選句)
 ○一句目 「作務衣着て」のさりげない表現に、淡淡とした老人の起居が想像されます。全体の作品を拝見していると作者の日常や日々の思い、どんな人生を送られてきたかが手にとるように見えてくるものです。それを俳句といふ「詩」に昇華させるにはすべてを言つてしまわないで、ちょっと隠すことが必要です。隠すことによつて想像の域がひろがつてくるからです。自分で答えを出さないで、答えは読者に委ねればいいのです。――〇〇人の読者の――〇〇の答。数式を離れたこんな面白い文芸が、ほかにあるでしょうか。七五一句の中から答えを問い合わせてくる句を私なりに選んでみました。

- 一句目 「作務衣着て」の手を止め、「どれ、どのくらい咲いたかちょっと見てこようかね」と見上げる早春の空。「梅のぐあい」が何とも妙。「少女のやうな」と形容した途端、縄文の土偶がいきいきと見えてきます。
- 二句目 季語の効果によって小春日のやわらかなやさしい日差しも感じられます。
- 三句目 もう少し夢を見ていいのに、うすうすと明けていく春の夜明けであることを、という句意でしようか。「春暁」と「春曙」は同義、「一炊の夢」と「邯鄲の夢」も同義なのですが、掲句の選択は見事。
- 四句目 この言葉は「さよなら」でしょう。相手との距離がだんだん遠ざかっていく情景が映画のワンシーンのように見えてきます。いつまでも手に揺れる夏帽子が印象的です。山鳩の声を合図のように始まる「植木市」。鳥ならどんな鳥でもいいかといふと、うそではありません。鶯や鶲なら興ざめを否めません。山鳩のくぐもつて、「植木市」の季節感が倍加されるのです。

長田群青選

■特選■

ていねいに生きる日々有り返り花

富士河口湖町 梶原道彦

八〇歳

菜の花や蛇笏の山河明るうす

市川三郷町 河西五十鈴

八五歳

山鳩が鳴いて始まる植木市

山梨市 丸山敏章

七一歳

まゆ玉や障子開ければ大菩薩

甲府市 白石栄子

七三歳

小春日や少女のやうな土偶の目

南アルプス市 小松和美

八四歳

■秀作■

射干に富士の山霧粗きかな

富士吉田市 宮下栄江

八二歳

冬ぬくし回向柱に幼の手

北杜市 小泉優子

七二歳

観梅や昼餉はジャズをききながら

韮崎市 樋口 芙美子

七八歳

言葉もう届かねば振る夏帽子

富士吉田市 渡辺武人

七九歳

雨畠の硯滑らか蛇笏の忌
富士吉田市 高山佐智子 八一歳
間引き菜の笊いっぱいの軽さかな
甲斐市 長谷川 勇 八三歳

霞立つ富士へ黙礼上京す
富士吉田市 勝俣茂 六三歳

泡立ちて逆巻く川や実朝忌
甲府市 河野一郎 六九歳

御柱曳きたる里の走り蕎麦
笛吹市 石倉正明 七二歳

張りのある祝詞が響く春祭り
山梨市 中澤薰 八一歳

(特選句)
○一句目 人生の晩年、特に大きな病を経験した後などは、こんな心境になるのでは
ないか。「返り花」のおだやかな光が心に沁みる。
○二句目 一面の菜の花。蛇笏が生涯を送った甲斐の山河への明るい挨拶の一句。
○三句目 山間の集落の恒例の植木市。朝、山鳩のぐぐわるような、親しみのある声
を合図に市が始まり、あちこちで活氣ある声が聞こえ出した。
○四句目 「大菩薩」は「大菩薩嶺」。「障子開ければ」の日常感がよい。小正月の「ま
ゆ玉」の華やかさが一句を締める。
○五句目 たくさんの中の土偶の中に少女のやうなあどけない目をした一体があつたのだ
ろう。「小春日」の暖かさが、時空を越えて伝わってくる作品。

■佳作■

強き香水街頭の占師

甲斐市 乙 黒明雄 七四歳

富士を背に冬木立ちたる峠かな

山梨市 中澤 薫 八一歳

初桜母を押し行く車椅子

甲府市 坂本春明 七五歳

日を溜めて風を孕みて吊し柿

山梨市 坂本好子 八五歳

剪定の腕伸ばしたり八ヶ岳の空

北杜市 細川富士夫 八五歳

春を舞ふ太太神楽神楽笛

甲府市 橋田泰昭 八〇歳

暮城へと続く坂道藪椿

韮崎市 樋口 芙美子 七八歳

産土へ続く参道草氷柱

富士吉田市 渡辺久美子 七四歳

雨の夜は静かなりけり嫁が君

大月市 増田徳江 八四歳

節分会福よぶこえの響きあう

韮崎市 澤登富美子 八〇歳

踏まれても踏まれても咲くタンポポよ

富士吉田市 岩田きみ江 八七歳

県境に向かふバスあり冬夕べ
甲斐駒ヶ岳の入り日は強し仏の座
韮崎市 白倉みはる 七三歳

韮崎市 伊藤啓子 七九歳

逆縁の背中の無言鰯雲

南アルプス市 塩澤弘子 八〇歳

母の節まねて八十路の齋打つ

甲斐市 佐野彌生 八三歳

冬めくや火の見櫓の影伸びて

大月市 山口美佐子 六五歳

波寄せし音薄氷のささやきか

都留市 大澤茂子 七八歳

吊橋までつづく山道四葩かな

南アルプス市 西川由紀恵 七六歳

夜詣の鈴音ひびく里神楽

南アルプス市 小松和美 八四歳

うつすらと風の足跡今朝の雪

甲府市 大森昌子 八四歳

さなきだに浮かぶ心経老桜

富士吉田市 宮下定治 八六歳

膳椀のいつかはひとり梅の花

都留市 板津松男 七四歳

処方薬ひとつ増へをり秋の風

富士吉田市 宮下節子 七九歳

ひらがなの名入りえんぴつ春待てり 北杜市	道村典子	七一歳
掘り起す土の匂いや日脚伸ぶ 甲斐市	長谷川勇	八三歳
糀殻を焼く夫の背に昼の雨 韮崎市	山本栄子	七〇歳
春北風水神祀る石祠 富士河口湖町	坪井美智子	八三歳
春昼やドリンクバーのアメリカン 甲府市	糠信富貴子	八五歳
蹲踞に潜りて遊ぶ懸巣の子 上野原市	岡部テル子	九五歳
轡や楔打ち込む父の鍬 北杜市	八代菜美子	七五歳
リハビリの杖の摺足別れ霜 富士吉田市	宮下定治	八六歳
深みゆく秋ともなればイヴモンタン 甲府市	嶋田英子	八二歳
初孫をふわり抱き上げ春ショール 北杜市	白川美知子	七三歳
代々の田の黒土や初景色 都留市	大澤茂子	七八歳
寒晴や群れなす鳥の羽光る 山梨市	大津昭子	七七歳

凍星や添い寝の吾子の息づかい
都留市 野中定代 七六歳
とんぼうや稚の目にある好奇心
大月市 秋山多美子 九〇歳

初霜や両手で包む汁の椀
富士吉田市 宮下節子 七九歳
傍らに妻の寝息や月涼し
富士吉田市 田邊守之 六九歳

春泥を背まで跳ね上げ下校の子
富士吉田市 田邊守之 六九歳
死語となる花嫁修業針祭る
都留市 前田智子 七九歳
春の日の中を行くなり京言葉
南アルプス市 塩澤弘子 八〇歳

抹茶塩添へ揚げたての露の臺
富士吉田市 鈴木眞人 八三歳
墓参り芽吹きの雨にぬれながら
富士吉田市 遠藤憲子 八一歳
木道に朝の声満ち水芭蕉
甲府市 大森和男 七八歳

※「年齢」は令和五年六月十六日現在です。
(山梨県シルバー俳句大会展示初日)